

ひまひまデータ

数字で遊ぶ
ボートレース

激変必至!級別条件&事故点アップで今後どうなるかシミュレーションしました

表1-1 ●96年以降、節間事故点50点以上

登番	選手名	開催初日	場	節間事故点	節間成績
3885	久田 武	2002/03/04	琵琶	55	11F4舫521F
4382	高山 智至	2008/01/09	丸	55	433F4舫1F5
4482	守屋 美穂	2010/11/09	津	50	F234失5F

表1-2 ●94年後期以降、期間事故点85点以上

登番	選手名	期	級	勝率	事故率	事故点	出走回数
3265	今村 暢孝	94後	B2	6.81	1.13	90	80
2719	沖口 幸栄	99後	B2	6.53	0.99	85	86
3959	坪井 康晴	01前	A1	6.55	0.63	85	134
4039	村上 功祐	01後	B1	4.49	0.63	85	135
4418	茅原 悠紀	09後	B2	4.56	0.77	92	119
3788	一宮 稔弘	10前	B2	6.36	0.86	85	99
4314	青木幸太郎	11前	A2	5.47	0.68	85	125
4928	栗城 匠	19前	A2	5.51	0.69	91	131
4413	水摩 敦	21後	A2	6.05	0.62	96	155
5177	松井 貴太	23後	B1	2.40	0.63	86	136



先月号のマクルールで級別審査の条件が大きく変わる詳細が発表されました。色々とびっくりしたのですが、特に！F持ちで優勝戦でFを切る事故点50点とは!!? 強烈です。

これまでの節間・期間の最高事故点はどつたのでしょうか。また、出走回数条件も変更されB1級が65以上になります。30年ほど前は、A級もB1級も出走回数条件は40走以上でした。級別条件やF休みがこの30年間でどのように変わったのかまとめてみました。

節間・期間の最大事故点

96年以降、1節間の最高事故点は55点。節間でF2本と妨害失格が重なってしまったようです。

そもそも1節間で50点以上の事故点を抱えることは非常に少なく、96年以降でわずか3件しかなかったことです(表1-1)。

1節平均45人としてのべ108万人分の節のうち、わずか3件なのです。この3選手ともこの期の事故点はその節の分だけでした(それ以外の節は事故点0)。

久田武選手は結果的にA2級をキープしていますが、高山智至選手と守屋美穂選手は出走回数不足(50走未満)のB2級となっています。

いよいよ8月レディースC前でGI選出除外期間も終了する守屋選手、デビュー4年目に期初めの節間F2で苦

したことがあるのです。

94年後期以降、級別審査期間の最高事故点は96点。事故点85点以上だったケースをまとめてみました(表1-2)。その96点はF2本(40点)と選責失格5回(50点)と不良航法3回(6点)。21年後期の水摩敦選手でした。でも水摩選手は155走しており、事故率は0・62。0・70をクリアしてB2級ではなくA2級にとどまれています。

級別審査期間で85点以上は10件ありましたが、事故率オーバー0・71以上のB2級は4件だけ。かなりの高事故率でもB2級回避はできているようです。

事故率8項(事故率1・00以上)はF2&選責失格5回の今村暢孝選手だけ。94年1月の新鋭王座の直前までで70点/63走で、新鋭王座の初日にFを切り、F休みの関係上、その時点で8項が確定したのでした。私が初めて見た事故率8項だったと思います。

その期はたまたまデビュー3期目の角谷健吾選手(50点/47走)、同1期目の岸恵子選手(50点/43走)も事故率の8項抵触をしていたようです。当時は出走回数条件40走以上&事故率1・00以上で8項抵触です。事故点30点でも43走(事故率0・70)でB2級回避できていたので、ついつい40走以上してしまい、まさかの8項も!ということがあったのかもしれない。

今後、これらの高事故点の記録が更新されるかもしれません。

F 持ち優出選手の結果

まず、これまでのF持ち選手の優勝成績をまとめておきましょう(表2-1)。優勝戦の選責ST事故で事故点10点加算となった06前期からおよそ20年間、全優勝戦のF持ち別の成績をまとめてみました。

優勝戦数は1万6544レースで人数としては9万9264人。F0で優出したのはそのうちの86%で8万5423人。14%がF持ちでした。F持ち選手1万3841人のうち、優勝戦でFを切った選手は65人だけでした。20年間で65人しか発生していません。今後、新ルールで選手自身が気を付けることになるので、もっと発生数は少なくなると考えられます。

ちなみにF持ち選手の優勝率は15・6%、F0選手の優勝率は16・8%。この集計でF持ち選手でも優勝率にはそれほど影響しないのです。今後F持ち選手が優勝戦に乗っ

たときはスタートを躊躇することになるのでしょうか。

F 本数の人数

次にF本数別の人数をまとめました(表2-2)。こちらもおおよそ20年間(40期間)の集計です。期の途中で引退した選手も集計に含めています。

級別審査期間でF1の選手は2万625人。1期平均515人ほど。およそ30%の選手がF1になっているようです。このF1までは、今後の新ルールでも同じ事故点です。F2は2582人。1期平均は65人でおおよそ4%の選手がF2に。F3は37人で、1期平均1人です。新ルールでどのくらいの選手が事故点加算になるのかというと、F2以上であるおおよそ4%の選手だけなのです。

過去の級別で、追加の事故点を加算してみると

06前期〜25前期の19年半について、追加の事故点を加算してみると大変なことになりました。この期間、元々50走以上と事故率0・71以上の選手は415人いました。ところが追加事故点を加算するとさらに605人も増え1020人に。事故率オーバーのB2級が2・5倍に増えました。

その415人のうち110人は勝率2点未満のそもそもB2級予定の選手。増加した605人のうち勝率2点未満は15人だけ。すなわちB1

級以上の可能性がありそうな事故率オーバーB2級選手は、300人から900人に増えたのです。1期平均で言えば、8人↓23人です。もちろんこのルールを知った上で走れば踏みとどまることも充分ありえますが、

一例を挙げるとこれらの選手が事故率オーバーのB2級に落ちていたことになりました(表2-3)。ちなみに06前期以降のF3の選手は37人全員がB2落ちになりました(3人がA1級、5人がA2級、4人がB1級に踏みとどまっていたのです)。

そして事故率8項(50走と事故率1・00以上)を集計するととて恐ろしいことに……。事故率8項は5人だけでした。40期で5人なので4年で1人の非常に少ないペース。追加事故点を加算すると超大幅増の113人に……。1期で3人のかんりのハイス。事故率オーバーB2級が2倍だ、3倍だの話ではありません。20倍以上！

B2級はあっせん日数が減るなどありますが走れます。このいわゆる8項はただのB2級ではなく、6か月のあっせん保留となり半年間走ることができません。F休みは選手会の規定、このあっせん保留は競走会の規定です。別々の規定のためか、以前は期間が重なるとその分休みが縮むことがありましたが、今は別々に加算されしっかり休むことになりました。

小芦るり華選手がデビュー1期目にF3と事故率8項となり、デビュー

表2-1 ●06前期以降、F持ち本数別の優勝戦結果

↓F持ち	優出合計	優勝	フライング
F0	85423	14382	586
F1	13501	2116	65
F2	339	45	0
F3	1	1	0
合計	99264	16544	651

25後期も集計に含めていますが、今年4月20日〜30日は含まれていません。

表2-2 ●06前期以降、期別F本数別の合計人数

↓F持ち	人数	F本数
F1	20625	20625
F2	2582	5164
F3	37	111
合計	23244	25900

表2-3 ●06前期以降、追加事故点を加算するとB2級落ちになる勝率上位選手

登番	選手名	期	級	勝率	出走回数	事故点	追加事故点	事故率	新事故率
3897	白井 英治	15後期	A1	8.20	98	67	10	0.68	0.79
4205	山口 剛	09後期	A1	7.65	113	62	20	0.55	0.73
3779	原田 幸哉	10後期	B1	7.53	60	42	10	0.70	0.87
4456	鎌倉 涼	24前期	A2	7.44	80	52	10	0.65	0.78
3719	辻 栄蔵	07後期	A1	7.41	101	70	10	0.69	0.79
3645	浅田千亜希	10前期	A1	7.31	86	60	10	0.70	0.81
3265	今村 暢孝	21前期	A1	7.20	111	72	10	0.65	0.74
3887	鎌田 義	16前期	A2	7.17	75	50	20	0.67	0.93
3554	仲口 博崇	08後期	A1	7.11	96	60	10	0.63	0.73
3774	横西 奏恵	10前期	A1	7.10	105	66	20	0.63	0.82

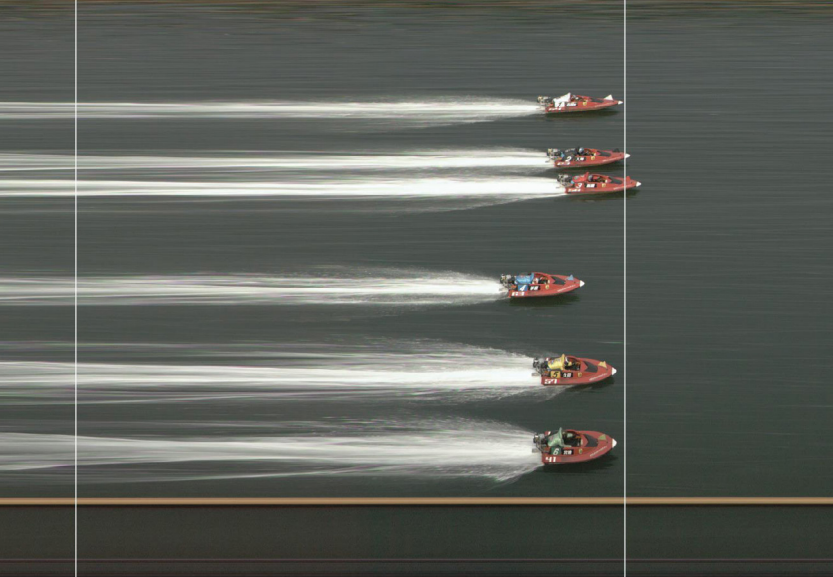


表3-1●12前期以降、B1級の出走回数分布

出走回数	人数	割合
[50-54]	392	1.9%
[55-59]	481	2.3%
[60-64]	580	2.8%
[65-69]	702	3.4%
[70以上]	18560	89.6%
合計	20715	

表3-2●12前期以降、A2級の出走回数分布

出走回数	人数	割合
[70-74]	173	2.0%
[75-79]	201	2.3%
[80-84]	201	2.3%
[85-89]	233	2.7%
[90以上]	7898	90.7%
合計	8706	

表3-3●A1条件70走以上のときのA1級の出走回数分布

出走回数	人数	割合
[70-74]	48	0.8%
[75-79]	66	1.1%
[80-84]	96	1.6%
[85-89]	136	2.2%
[90以上]	5787	94.4%
合計	6133	

12前期以降(27期間)、勝率ボーダーなどをクリアしていながらA2級に落ちた選手は150人です。

12期目と3期目のおよそ1年間を走れなかったことは記憶に新しいのではないだろうか。勝率はデビュー6期目まで免除ですが、事故率の方はデビュー1期目でも6か月のあつせん保留となります。

そんなあつせん保留6か月が1期で平均3人も出るようなことがあればある意味異常事態かもしれない。元からある相当厳しいルールです。元から選手が一番警戒するところになるかもしれません。最終的には4年に1人が、2年に1人くらいのペリス(従来の2倍)で収まっています。

先ほど、追加の事故点加算は全選手の4%程度ですからそれほど大したことではないかもと書いていたましたが、個々の選手で見ていくと、とんでもなく怖いルール改正のようです。

出走回数条件について

A2級、B1級のそれぞれの出走回数分布を調べた方がよさそうです(表3-1)。12前期以降の27期間の集計です。B1級は2万715人の50〜64走でB1級になった選手はその中の7%(1453人)でした。1期平均では54人の選手がこのままではB2級になってしまう選手でした。

A2級は8706人(表3-2)。このうち70〜79走でA2級になった選手は4.3%(374人)でした。1期平均では14人程度。もちろん、今後は65走や80走を目標として走ることになるので、これまで通りの割合で下の級に落ちてしまう選手が発生するということはないでしょう。

この手法で、A1級が70走条件だったときと90走条件だったときの出走回数分布を比べてみました。A1級定員率20%で70走条件だった98後期(01後期(7期間)と05前期(11前期(13期間)の合計についての集計です(表3-3)。

この20期間で70〜89走でA1級になつていった選手はA1級全体の5.6%(346人)でした。このままいけば1期平均17.3人の選手が出走回数不足のA2級になってしまうところでした。

その後90走条件となつた12前期(前期(27期間)でA1級勝率ボーダーと事故率条件をクリアしていながら70〜89走でA2級となつた選手数を数えると150人でした。1期平均では5.6人です。17.3人と比

べると、実際は3分の1に減っていますね。

A2/B1級出走回数70/50走時代のこのまま新ルールを迎えれば、A2級は1期平均14人、B1級は54人が出走回数条件をクリアできないとわかりましたが。勝負駆けを頑張つて3分の1に減ると考えると、A2級は5人、B1級は18人程度がこのルールにより下の級に落ちるような感じになるでしょうか。

事故率条件0・40(0・395未満)がある開催

事故率条件0・40がある開催の選考には大きな影響が出るのではないだろうか。

「G I レディイスC・G I ヤングD B・G I スピードQM、G II レディイスAS、G III ウエスタンY/イースタンY」。

2本目のFを切つたとして加算分の事故点10点分の「借金」を消すためにはおよそ25走の無事故出走が必要となります(10点÷0・395=25・3走)。

20点であれば50走分も必要。選賃失格の10点であれば早い段階で消すことも可能ですが、F2以上のフライング絡みですから、走れない期間(F休み)が出ているはずですよ。

F2の60日間は、1か月平均20走と考えれば、F休みで元々40走分の借金を背負っている状況でもありません。その上25走要求されるとなると、どんどん苦しくなるのでは。そのFの2本目が優勝戦であつたなら50走もさらに必要です。